

佳作

あ、あ、あ、ありがとう。

北海道 石垣 智世

2歳半の頃、お祭りのときに獅子舞にかまれて以来、私はそのショックからずっとどもりを持っている。それは、高校1年生になった今でも変わらず、同じ言葉を何度も繰り返し言ってしまったり、言葉が出なくなってしまうことは日常茶飯事だ。最初こそ気にし、人に馬鹿にされ泣くこともあったが、今ではもう自分でどもったことに気付かないくらいなんとも思わなくなっている。そのことを人に伝えれば、「偉いね」という言葉が返ってくるのだが、それは違うのだ。私がどもりを気にとめなくなった理由は、決して私が強くなったからとか、そういう理由ではない。

私がどもると、周りの人は大抵何も言わずに待っていてくれる。

幼いころは確かに心無い言葉を言われることもあったが、大きくなった今ではもうそんなことを言う人は居ない。居たとしても、それ以上に、どもって中々上手く喋れない私を何も言わずにじっと待っていてくれる人が殆どだ。そんな周りの人たちが居てくれるから、私は自分のどもりを気にせずに、明るく喋ることが出来る。

高校に入って、私は放送部に入部した。

原稿を読むときに、自分の読む番号を言わなければいけないときがあった。自分の原稿は何度も練習したから、どもらずに読める。しかし、番号はその場で知るものなので勿論練習なんて出来ない。「2番」といつもの自分の原稿の前に言う、たったそれだけのことだったのに、言葉が出なかった。辛かった。

悲しくなって周りを見た。きっと冷やかされると思った。

だが、喋りだせない私を聞いているみんなは何も言わず、じっと待っていてくれていたのだ。周りの優しさに息が詰まった。

私は、今では寧ろどもりを持っていて良かったと思える。どもりのおかげで人の優しさを知れたからだ。

「あ、あ、あ、ありがとう」。どもりながらもいいから、私を待っていてくれるみんなに、心から伝えたい。